読む一人話芸「講談」が面白い

軍記や武勇伝などを独特の調子で語る「講談」は、戦国時代の「御伽衆（おとぎしゅう）」がルーツとなる日本の伝統話芸です。釈台（しゃくだい）を叩きながらリズミカルに物語を進める講談には、同じ一人話芸の「落語」とはまた違った魅力があります。

講談のルーツは戦国時代

講談師の祖とされているのは、赤松法印という戦国時代の僧侶です。赤松法印は、徳川家康に『源平盛衰記』や『太平記』といった軍記物を読み聞かせたといわれています。現在一般に知られている講談の原型は、江戸時代の「辻講釈」です。辻講釈とは、道端や寺の境内で、軍談や講談を行い往来の聴衆からお金をもらうことです。辻講釈を行う講釈師が都で人気を博し、江戸時代後期には講釈が話芸としての形を整え大衆に定着していきました。

落語と講談は、似て非なるもの

落語と講談は、同じ一人話芸の伝統芸能であることから、比較されて語られることが非常に多いです。どちらも着物を着て一人で高座に座り、お客さんに物語を聞かせるところまでは同じですが、その語りには大きな違いがあります。落語は主に登場人物の会話で進みますが、講談は台詞とともに、台本でいうところのト書きまで読み聞かせます。落語は台詞を演じ分け、講談は物語を語る芸です。

講談を盛り上げる張り扇

落語の小道具が扇子と手拭いなら、講談の小道具は「釈台（しゃくだい）」と「張り扇（はりおうぎ）」です。和紙でできた張り扇で、釈台と呼ばれる小さな机を打つのが、講談のスタイルです。張り扇は太鼓のばちのような役割を持ち、扇という名前ではありますが開きません。打つタイミングは、物語の句読点や場面転換のときなどで、その音は、パンパンではなく「ポンポン」と表現されます。

七五調でテンポのいい修羅場読み

講談の大きな特徴として、「修羅場読み」という独特の読み方があります。戦の場面で、武士の名前や身なり、軍勢の数、その場の光景などを、調子を取りながら朗々と読み上げていくのが、修羅場読みです。修羅場読みは、ほかの話芸である朗読や語りにはない独特の読み方です。リズミカルな七五調の語りの要所要所に、ポン、ポンポンという張り扇の音が入り、音楽のような心地よさを演出します。

多種多様な講談の演目

芸としての歴史が長い講談には、多種多様な演目があり、時代とともに新しい演目も生まれ続けています。現在演じられる講談の演目は、「軍記物」、「御記録物」、「世話物」の三つに大別できます。

水戸黄門や大岡越前、国定忠治、柳生十兵衛、清水次郎長など、テレビドラマや映画でおなじみの人物が主人公の物語も数多く見られます。

落語には講談と同じネタがたくさんあり、講談で流行った演目が歌舞伎や浄瑠璃になることもあります。

軍談（ぐんだん）

講談のルーツといえる軍談は、源氏と平氏の騒乱や、戦国時代などの合戦や武将の物語です。戦の盛り上がりの場面により臨場感を与えるために、修羅場読みという技法が使われるようになりました。
『源平盛衰記』や『太平記』、『三方ヶ原戦記』など

御記録物（ごきろくもの）

軍談よりも娯楽的な要素が求められるようになり生まれた「御記録物」は、将軍家や大名家に伝わる記録や伝記を題材にした物語です。諸家の出世美談、名君名将の物語、仇討ちなどを描いています。
『赤穂義士伝』や『太閤記』、『真田三代記』など

世話物

江戸時代の町人社会の事件やできごとを題材にした世話物は、ジャンルが多岐にわたるため、さらに細かく分類されます。

白波物 … 泥棒が主人公の物語。『石川五右衛門』、『鼠小僧次郎吉』など
力士物 … 歴代横綱の伝。「寛政力士伝」「関取千両幟」など
怪談物 … 亡霊や怨霊などが登場する物語。「四谷怪談」「番町皿屋敷」など
侠客物 … 義理・仁義に厚い親分、貸元などを主人公とする物語。
「幡随院長兵衛」「清水次郎長」など
ほかに、漫遊記や高層伝、名人奇人伝なども

講談こばなし

女性や若手の講談師の登場で注目が高まる

一人話芸というと落語の人気が圧倒的で、永く日陰の身であった講談ですが、もっともチケットの取れない講談師として知られる六代目神田伯山氏の活躍により、俄然注目が集まっています。講談をテーマにした漫画や小説、絵本なども登場し、今まで講談とは無縁だった若者にも注目されています。

講談は歴史物を語る古典芸能の印象が強いですが、落語同様に新作もたくさん演じられています。現代の世相や社会事情を題材にした作品はもちろんのこと、スポーツや経営論、漫画、アニメなどジャンルはさまざまです。かつては男性が演じる芸とされていた講談ですが、現在では女性講談師の数が男性を上回り、女性演者にふさわしい新作講談も続々登場しています。

伝統芸能としての魅力を保ちつつ、社会や文化の変化に伴い変わり続ける講談の世界は、一見の価値ありです。